

## 昭和30年代・濃尾平野と周辺の中世城館

服部, 英雄  
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

<https://doi.org/10.15017/17119>

---

出版情報 : 比較社会文化. 16, pp.121-264, 2010-03-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



## 昭和30年代・濃尾平野と周辺の中世城館



小幡城

服 部 英 雄  
Hideo HATTORI



# 昭和30年代・濃尾平野と周辺の中世城館

2009年12月23日受付

服 部 英 雄

Hideo HATTORI

キーワード：濃尾平野 三河 中世城館 城館遺跡の破壊と保存 顕彰 石碑建立 大正御大典と  
史蹟名勝天然紀年物保存法 蓬左文庫城郭絵図 地誌の城館叙述

戦国時代の濃尾（美濃・尾張）平野は織田信長のもとに統一化されていく情勢下にあって、多くの土豪が拠点となる城や館を構えていた。城や館の遺構は江戸時代を通じて農村景観のなかに残されてきた。近世地誌（『尾張徇行記』、『張州府志』、尾張志など）やそれを継承する近代地誌が、城館について詳細に記述しているのは、遺構が残り、伝承も残されており、加えて地域の識者の遺跡（城跡）への関心が深かったからである。蓬左文庫には多数の城郭絵図も残されている。戦後復興・区画整理・市街地化・「高度成長」なる列島改造・圃場整備が進行するまでは、それらの遺構は良好に残されていた。しかしながら、多くがまたたく間に消滅してしまった。

今は消えてしまった遺跡を、筆者はかなりの数、写真撮影している。昭和30年代、少年期を名古屋で過ごしたが、当時の私は（いまもそうなのだが）、城（城跡）探訪が好きだった。城跡探訪が最大の趣味であった。当時の愛知県立図書館（栄町）・郷土資料室は中学生が利用できないという、きみょうな規則になっていた。自分は中学生だったが、毎週、土曜午後には県立図書館に通っていた。資料が閲覧できなくてはしかたがないので、やむをえず閲覧カードに「某高校1年」と記入し、郡誌や江戸時代の地誌などの城に関する文献を懸命に書き写した。むろんコピー機は存在していなかった。翌日日曜には自転車で現地に行く。そういう作業を繰り返していた。

だから中学生の時には実に多くの城跡を回った。高校生になっても、しばらくはそんなことを続けていた。撮影した写真も多いし、いまとなっては貴重なものばかりである。その範囲は濃尾三、つまり美濃、尾張、三河、名古屋から自転車で日帰りできる範囲である。

昭和63（1988）年度から愛知県教育委員会は中世城館分布調査を実施した。私は分布調査の責任者であった愛知県

教育委員会文化課・赤羽一郎氏に、中学生の頃に写した昔の写真を見てもらった。そのうちのいくつかは報告書にも掲載していただいている。九大に異動してから、静岡県史編纂委員会事務局より、報告書に入れた鳴海城の写真を使いたい、という照会の電話を受けた。鳴海城は今川義元の前進基地となった重要な城である。現況ではビルばかりが林立し、城跡らしい写真の撮影ができないとのことだった。しかし恥ずかしい話だが、なにごとにも整理が悪く、そのときこれらの写真の所在が不明で提供できなかった。

文化庁文化財保護部記念物課に勤務している間は、史跡の保護、保存業務に携わっていた。この調査事業の時、名古屋市教育委員会の小島一夫先輩と、名古屋市内に残る城跡で史跡に指定して保存を図る価値のある城はどこだろうかと話したことがあった。その時の私には小牧・長久手合戦の主要な舞台になった小幡城が念頭にあった。記憶のかぎりでは小幡城は残りがかなり、よかった。しかし全く話がかみ合わなかった。小幡城跡は何も残っていないというのである。むしろ守山城跡の方が残っているという。それは自分の記憶とは全く逆だった。

小幡城跡現地をたずねたが、堀があったとおぼしきところには幅の広い道路ができていた。城の下に一面に拡がっていた深田は、市街地になっていた。ビルもいくつか立ち並んでいた。

今回、戦後に何回か撮影された航空写真を見てわかったことだが、はやくからこの小幡台地上は区画整理が進められていて、城跡は家が建つばかりになっていた。近年『新修名古屋市史』が刊行されたが（1997～）、2巻によると小幡城跡にはそれでも土壘の高まりが残るとして写真も掲載されている（632～634頁）。筆者撮影の写真には堀によって断ち切られた台地が写っており、一見して城跡とわかる。本丸は近世絵図に画かれたとおりに土壘も堀も残ってい

た。長久手合戦にて、豊臣秀吉軍が小幡城を攻略した際には、徳川家康は退却したあとで、もぬけの殻、秀吉を悔しがらせ、家康の名を高からしめた。史上名高い小幡城跡の在りし日の姿である。

大正年間につぎつぎに刊行された『愛知県史蹟名勝天然紀年物調査報告』(愛知県)にはいくつかの重要な城跡の報告があり、古写真も載っていた。「第4」(大正15年、1926)にこの小幡城が掲載されている。この『報告』に掲載されている大正時代の古写真は、筆者が知る景観とはちがって山林になっているが、木立を透かして見える丘の形そのものは全く同じである。小牧長久手合戦で徳川方の城として重要な役割を果たした小幡城は、徳川政権にとっては記念碑的な存在であって、詳細な図面も作成されて屋敷の名前も記録されている。江戸時代には顕彰の対象で、現地踏査が行われていた。おそらくは尾張藩の御留地(公有地、禁足地)になっていたと思われる。すくなくとも大正時代まで、の愛知県では、極要な城跡遺跡として認識されていた。どういう経緯でいとも簡単に破壊されたのかは、また調査してみるべき課題である。

清須城の外郭、「御土居の松」から水田として続く堀跡を見たときは驚いた。感動に近かった。そのときはフィルムの残りがなく、1枚しか撮影できなかった。結局その後は行けなかった。数十年後に行ったときは何もかもなくなっていて、御土居の松の碑だけがあった。

ここに掲載した写真と同じ場所から撮影した写真がやはり『愛知県史蹟名勝天然紀年物調査報告』第3(大正14年)にある。民家の屋根の形は同じである。木立は盛衰こそあるが、同じ位置にある。

遺跡破壊の光景に最初に直面したのは小田井城跡である。わたしの中学校区は名古屋城のお堀端から西は惣兵衛川という川まであった。惣兵衛川からすこし西にいくと、庄内川の二重堤防(複線堤防、現在は単線)である。さらに名西橋という長い木の橋を渡ると西枇杷島町になる。ここに小田井という村があって、小田井城跡は村はずれの田の中にあった。

小田井ということばには名古屋の人間にはあるニュアンスがあった。江戸時代の庄内川堤防は名古屋城下を守るために左岸名古屋側が高く二重に、右岸小田井側が低く一重で築かれていた。小田井の人々も名古屋側の堤防工事に動員される。働くふりだけして実際には働くない。そこで小田井人足・オタイモンなる言葉が生まれた。あくまで比喩だったのだが、伯父など「ありやー、おたやあもんだわ」(あの男は小田井ものだ、しごとをしない)といっていた。父は小田井人足といっていた。悪口同然であった。封建時代の施策と抵抗に発する一種の差別語で、いまは死語である。

この話からもわかるように、小田井村は庄内川の自然堤防上に立地していた。さらに村の西にも微高地があつて、そこが小田井城跡だった。田の真ん中に小塚があつて、大正5年(1916)、愛知県が建設した石碑がその上にあった。それがある日突然消えた。気がつくとはるか手前の村の中に、小公園が建設されていて、そこに碑は移されていた。その地は城跡周辺であつても城跡とはいえない。子供心にも大人のすることは卑劣だと思った。真剣に新聞への投書を考えたけれど、中学生だったから実行には到らなかった。悔やまれる。遺跡の破壊を許せないと思う気持ちはその時に根付いて、以来消えることはない。

現在、移設先の小公園を城跡と考える人が多いようだが(インターネットによる)、愛知県の城跡で、石碑しかないものは、本来の位置を吟味する必要がある。

今これらの写真を眺めて思うことは、研究上の指導者には恵まれなかったということだ。小田井城にしても、石碑のある微高地にたどり着く前には、道は一段低い田を通過した。堀跡だった。その堀跡をたどって確認したのか記憶がない。写真にあるように清須城の外郭の堀の存在は知っていたが、それに沿ってじっくり歩いたことはなかった。遺構主義ではなかつたし、中心のみで周辺に関心がなかつた。モニュメント(石碑)保存の欺瞞にも気づいていなかつた。

『西春日井郡誌』は1923年(大正12)、『愛知郡誌』は同じ1923年の刊行である。ともに城館跡について詳しい記述がある。東西何間、南北何間など、また空堀や土塁(土居)の遺構の状況について記されている。とりわけ『愛知郡誌』は詳しい。しかしこの数字はおそらく『尾張志』あるいは蓬左文庫城郭絵図の踏襲の可能性が高い。尾張藩官撰地誌である『尾張志』は、復刻されたのが1969(昭和44年)であり、それまでは和装本しかなかつたから、中学高校時代の著者には閲覧する機会がなかつた。しかし『愛知郡誌』・梅森城に「本村古記録ニ東西式拾四間・南北參拾八間ト書ケルコト尾張志ニ載ス」と記した上で、「東西九間・南北式拾參間」と記しているのは、やはり編纂者らが自ら現地に赴いているからではなかろうか。先行する記録を踏襲することもあったのかもしれないが、現地を再調査した部分もかなりある。机上で書かれた書物ではないとすれば、大正期には遺構はほとんどが視認することができた(『愛知郡誌』には「旧字」という表記も多い。大正期に実施されていた字表記は、従前のものとは異なっていたらしい)。

しかし戦後に書かれた郷土史には具体的な遺構の記述があまりない。私が現地に行ったときにも郡誌の詳細な記述にもかかわらず、明瞭な遺構が確認できないものは多かつた。思うに名古屋市内では戦後復興として区画整理事業が大々的に推進された。区画整理にあたって城跡遺構の保存

が考慮されるはずはなく、空濠などの遺構が道路で分断されていったようだ。調査した昭和30年代後半はその事業がいったん完了したあとだったらしい（筆者の小学校1年・昭和30年に区画整理事業に伴い自分の家が建て替えられた）。『川名のあゆみ』によれば、「川名城（伊勝城）の跡は区画整理までは歴然としていたが、いまは説明者がなればわからない」とある。

名古屋近郊・市街地周辺部では区画整理実施は中心部よりは遅れたから、たまたま目撃したのが、郡部だった小田井城での区画整理実施現場ということになる。小幡城は区画整理が不完全に実施された段階であって、つまり住宅が密集する以前で、台地と台地下低部を結ぶ道路もできていなかったから、濠をはじめ姿をよくとどめていたのである。清須城外堀は筆者が現地を調査した後に区画整理が実施されたことになる。

ここで取りあげた城跡には、石碑が建立されているものも少なからずある。江戸時代に二基も建立された清須城は別格としても、長湫城にも尾張藩士によって文化六年（1809）に碑が建てられている。述べたように尾張徳川家にとって、長久手合戦は徳川家康が豊臣秀吉に勝利し、徳川治世の礎とした記念碑的勝利だから、江戸時代から顕勝されている。明治時代に建立された上野城のようなものもある。最も多かったのは大正5年に建てられたもので、「大典」「御大典」の文字が彫られたものもかなりあった。大正天皇即位式（大典）は大正4年11月だったから、記念行事において、県内郷土の遺跡の顕彰が行われた。建立主体は碑文を見る限りでは、ほとんどは愛知県だった。規格が同じだったかは不明。しかし沖城のように、三村有志による建立もあった。

石碑の日付自体は大正4年11月そのものが勝幡城、蟹江城など海部郡のものに2点ほど、ほかは大正5年4月、9月、11月などばらばらで、統一性はない。町村史を読むと、実際の建立がさらに遅れたものもある。大正6年（1920）羽黒城碑をみると愛知県建立と書かれているが、金額が記されており、金五拾円が建設工費でうち金拾円が愛知県補助金、建設および土地所有者石田市五郎とある。

このあとに、大正8年（1919）4月史蹟名勝天然紀年物保存法が公布されている。その影響は少なからずあつただろう。蟹江城石碑の文案を読むと、「今茲當大典本県調査名勝旧蹟此址亦居其一因建碑伝史蹟於後世」とあるから、運動していたことはちがいない。保存法公布よりは石碑建立の方が先行していたが、機運は一体化していたらしい。他県と比較しても愛知県には大正5年の顕彰碑がかなり多いという印象を持っている。

昭和天皇の即位式は昭和3年11月である。昭和3年建立の石碑もあるが、同じ状況であろうか。しかし大正5年の

碑の方が、圧倒的に数が多い。鳴海城碑（愛知県）は昭和20年3月建立だから、太平洋戦争下にも石碑建立は継続されていた。なかには今村城の碑のように行行政ではなく、子孫（民間）が建立したものもあって、注目される。

紛らわしいものもあって、戸部城には石碑が4基ある。1は当古城主戸部新左衛門政直墓地移転記念碑、昭和四年：2は戸部新左衛門政直靈碑、明治七年後胤戸部新吾建之：3は句碑で昭和三三年：4は戸部城址碑とのみある。戸部新吾は美濃国本巣郡軽海村の人である。『愛知郡誌』に「戸部新吾ナル者、自ラ其裔ナリト称シ来テ、之ヲ以テ其祖ノ旧址ヲ表セシナリ」とする。張州府志には戸部新左衛門は全く登場せず、愛智氏、一色氏、水野大和守らの名がある。経歴・来歴については検討が必要であろう。

このように愛知県の城跡には大正から昭和初期にかけて多くの石碑が建てられていた。伝統からいえば、その当時には愛知県は史跡の保存には熱心であり、遺跡保護の先進県だった。しかし半世紀を経て、宅地開発などの際、石碑はじゃまになって道路端や小公園に移されていった。遺跡顕彰・保護の伝統はまったく受け継がれなかった。

東京周辺で学生時代を過ごしたが、松戸市近郊で小金（大谷口）城や根戸城など、横浜では小机城など同様の運命をたどった城跡を見た。残念だがそれでも、大谷口は簡単な縄張図作成が行われ、のちには発掘調査も行われた。小机城は第三京浜国道で破壊されたけれど、周囲は保存された。保存への問題提起がなに1つとしてなされずに多くが消えていった愛知県は、まったくの後進県になっていた。

破壊の一方では模擬天守の建造も盛んになった。それまでになかった建物が建てられたのを目撃したのは、小牧山が最初で、同じ頃龍泉寺城が建てられた。

いま報告書によると、大草、大野、新居、岩崎、そしてほかにも清須、墨俣等各地に模擬天守が建てられているようだ。小口城には城郭建物も復原されたらしい。岩崎城・大草城は残りがよかつたのだが。私が城郭建築の復元を好きにならず、むしろ復元をしたがる人間を軽蔑するのは、子どもの時に体験した小牧山の天守復原から受けた気持ちが尾を引いているからだ。文化庁在職時代に、古い書類を見ていたら、国指定史跡小牧山における「天守」復原を当時の文化財保護委員会が、「郷土資料館」建設として許可していることが分かった。これも情けない気がした。

上条（じょうじょう）城は全体の中でも土塁と堀の残る保存のよい城であった。しかし個人の宅地で相続が発生したらしく、転売された。平成18年に春日井市が調査を行ったが、当時の状況に合う土器などは見つからなかったらしい。ふしぎなことに当時既に上条城碑（本稿掲載）は行方不明であった。入り口にりっぱな長屋門があったが、火災にあって半焼し、その後取り壊しになった。現在は中心部

は月極駐車場となって、かろうじて土壘と堀は保存されている。史跡（文化財）指定がないので、保存の見通しは所有者の意向次第ということだった。

40年、30年前の愛知県の文化財保護に対する姿勢をいまになって嘆いても始まらない。しかし、いまだ改善された気配もない。現在の城跡の状況はインターネットからもうかがいしれるが、あわれなものである。趣味的な写真には学術上の価値はない。ながくそう思っていて、自分の記念にだけするつもりだった。だが筆者が撮影した多くの城館がなんらの記録保存の措置もとられずに消えていった。すべてが失われたいま、写真を公開・公表しておいた方がよいのではないか。

昭和20年代の修理の箇所について議論のある小里城石垣について、昭和40年の写真を提示することも意味があるのではないか。

そう思ったのはいまから10年ほど前である。多少の準備もしたが、福岡西部・玄海沖地震で、六本松の書棚が余震を含めて2度も転倒し、ふたたびアルバムは行方不明になった。実情をいえば今回のキャンパス移転でやっとアルバムが出てきたのである。

スナップ写真だけでは学術的な意味も少ないので調査時のメモも付記することにする。戦後の状況を語ってくれる米軍撮影の空中写真もあわせて検討の材料にすることにした。あれほど良好に残っていたのだから、小幡城のホリや、清須城の外郭外堀が当時の空中写真からも読みとることができるのは当然である。『愛知県中世城館跡調査報告書』には地籍図も掲載されている。当時の拙いメモと写真、そして空中写真さらに地籍図によって、総合的に検討できる。さらには名古屋市蓬左文庫の近世絵図は有効な史料だ。少しでも城の記憶につながるものは情報提供したい。

本稿写真は、田園景観が卓越していた濃尾平野と西三河における中世城館跡の様子を知ることができる、数少ない学術情報だと考えている。

備考：蓬左文庫各村古城絵図の転載については蓬左文庫および愛知県教育委員会より許可を得た（平成22年3月6日付21指令教蓬第1-163、164、同3月15日付21教生第2524）。

城館一覧：写真番号を（ ）に示す。写真以外の番号はノート（野帳）に対応する便宜的なもの。▲は写真を欠く。

\*（ ）内写真番号または番号（写真を欠くが見取図のあるもの）

番号（野帳記載分）・城館の名前（別称）・所在地住所・伝城主・石碑・説明板・文献と郡誌編纂時（おおむね1920年代）当時の遺存状態・関連する地名

\*文献、市町村名、現状など、原則として昭和30年代当時のものである。文献は網羅ではなく、調査の参考にした箇所の抜書である。

## 愛知県（尾張部）

### A-1 西春日井郡、東春日井郡、愛知郡分・城館リスト（野帳記載分）

#### ○西春日井郡・中島郡

写真番号（1）

1 清須（清洲）城・清洲町清洲古城北市場、新川町寺野・斯波氏、織田氏、福島正則、松平忠吉ら・石碑（1弘化年中2文久二年）・銅像（織田信長）・本丸、三の丸外堀（南方、東方）・土居・地名：古城、土居

#### ○西春日井郡

写真番号（2）

2 小田井城（織田井城・於多井城）・西枇杷島町下小田井字古城・織田敏定・石碑（大正五年十一月・愛知県、御大典記念事業）、のちに宅地開発行為で二〇〇メートル東の別位置に移設、城跡とはいえない場所だった・張州府志、尾張志、西春日井郡誌（東西30間×南北52間、内外二隍）、西枇杷島町史によれば、明治地籍図が本来の形状で、現状と形がちがうのは名鉄名古屋本線（1914開業）線路敷設の際に削ったため、本来は三メートル近い高さがあったとある。

写真番号（3）

3 小田又六居城・名古屋市西区山田町大字上小田井字坂井戸・織田又六郎信張・西春日井郡誌、名古屋市史跡名勝紀要・尾參宝鑑系図・井戸、地名：坂井戸・井筋、（道路拡張のため井戸が埋められる直前）

写真番号（4）

4 比良城・名古屋市西区山田町大字比良字城屋敷・佐々成宗、佐々成政・石碑（大正五年九月「當大典」・愛知県）・説明版（昭和三一・名古屋市）・張州府志（東西38間×南北40間）、西春日井郡誌・地名：城屋敷、城の切

写真番号（5）

5 平田城・名古屋市西区山田町大字平田城の切、長田銀次郎氏宅に井戸・平田和泉守、平田伊豆守・名古屋城史、張州府志、尾張志、西春日井郡誌、名古屋市史跡名勝紀要・城内井戸・地名：城、城西、城の切、長池（長池樂音寺薬師如来は平田和泉守持仏）

写真番号 (6)

6名塚城（名塚砦）・名古屋市西区名塚町4-70白山神社境内、字郷・庚申塚は旧庄内村役場跡、伊勢田、鳥見塚、砦跡に白山神社が移転・説明板は稻生が原古戦場、織田信長、織田信行の兄弟合戦、柴田勝家、佐久間大学ら・名古屋市・張州府志、尾張志、西春日井郡誌

写真番号 (7)

7西志賀城（平手政秀古城A）・名古屋市西区西志賀公園・平手政秀自害地・石碑（愛知県）・張州府志（城主未詳）、尾張志（城主未詳）、金鱗九十九之塵（平手政秀古城）＊城主未詳の西志賀城Bと平手政秀古城Aが同一であるかは不明。

番号 (8) 見取り図のみ

8田幡城（越智氏城跡・田畠城）・名古屋市北区金城町1-12林泉寺境内一帯・越智右馬允信高・張州府志、尾張志、金鱗九十九之塵48、信長公記・熱田風土記卷4

写真番号 (9)

9沖城（林通勝邸）・西春村大字沖村・林通勝・石碑「大正□□大典紀念」「西春村大字沖村有志」・張州府志

写真番号 (10)

10九之坪城・西春村大字九之坪字城屋敷75・築田出羽守正綱・張州府志、西春日井郡誌（築田氏位牌：天正七年、過去帳は九之坪村瑞雲寺、十所社に築田氏寄進棟札、愛知郡沓掛村聖応寺にも同家の遺跡）

写真番号 (11)

11高塚山（高塚神社、城）・西春町鍛冶が一色・城主未詳・西春日井郡誌（東西60間×南北40-50間）・地名：島、鎧掛けの松

写真番号 (12)

12鹿田城（しかた）A・師勝町鹿田蒲599大口兼芳、豊宅南蒲屋敷596～626・大口右京進・張州府志、西春日井郡誌、師勝町史（大口右京進・子大口右京亮、慶安四年没、洞雲寺に碑・地名：土居裏、蒲が池）

▲13鹿田城（しかた）B、魚住隼人城・西春日井郡誌（位置未詳、三河の鳥居、尾張の魚住、鳥魚一対）

写真番号 (13)

14熊之庄城・師勝村大字熊之庄字御城屋敷3006永津（寺川）義治宅裏・溝口左京進・西春日井郡誌、師勝町史（石蔵山

にあった虚空蔵菩薩は熊之庄の日光寺に安置、武衛堤は熊之庄城を守るため斯波武衛が築いた堤）・溝口氏は熊之庄から豊場城に移る、溝口姓は豊場に多い。

写真番号 (14)

15井関城・師勝町井瀬木1333舟橋氏宅一帯・佐々伊豆守成宗・西春日井郡誌（附近の堀の跡）、師勝町史（成宗は比良に移る）・当時聞き取った伝承に伊豆守は33歳で兄弟ともに戦死、死後子孫が比良に移る。

番号 (15) 見取り図のみ

16豊場城（溝口氏城）・豊山村字豊場字城屋敷・溝口富之助・西春日井郡誌（東西3丁×南北1丁、城跡の弁天池にあった弁天は常安寺池中にまつられる）・地名：城屋敷、弁天池、堀之内（城屋敷の西）

▲17安井城（鳩岡城）・名古屋市西区安井町2-20山神社西南一帯・天正中、安井将監、浅野長勝・西春日井郡誌（東西90間×南北80間）・地名：字土居

写真番号 (16)

18上野城A（鍋屋上野城）・名古屋市千種区鍋屋上野町、上野小学校東一帯・下方左近貞清・石碑1明治四十年、2昭和三年五月 名古屋市、下方左近墓碑は小学校校地の西北給食所の当たりにあったが、今は平和公園に移転・張州府志（東西60間×南北12間）、下方覚書（四方二重堀、今は段々埋まる）

▲19上野城B・名古屋市千種区鍋屋上野町・小関源五右衛門・張州府志（東西30間×南北43間）

写真番号 (17)

20石黒重行城・名古屋市北区楠町如意 大井神社東・石碑

○東春日井郡

写真番号 (18)

21小幡城（織田源次郎古城）・名古屋市守山区大字小幡字西城2040・岡田与七郎、岡田重善（星崎城に移る）・愛知の史跡と文化財、東春日井郡誌、守山市史、古城古図、小幡古城図、張州府志（東西110間×南北40間）、名古屋タイムズ年不明1,26・地名：西城

写真番号 (19)

22守山城・名古屋市守山区守山町市場133二城町・津田弥十郎（松平清康が横死した守山崩れの舞台）・石碑（大正五

年・愛知県)・守山市史(東西48間×南北42間)、尾州古城志(東西32間×南北28間一重堀、本丸のみか)・地名:市場

写真番号(20)  
23龍泉寺城・名古屋市守山区吉根、松洞3253龍泉寺境内に同じか・織田信行・張州府志、東春日井郡誌

▲24川村北城(河村城)・名古屋市守山区川(小坂甲578)・牧下野守長義、津田武衛・東春日井郡誌、尾張古城志、守山市史(大永寺の岡田時常墓碑に川村城主、長命寺から権平坂を登った左の一画が北城、沢を隔てた南が南城)

▲25川村南城・名古屋市守山区川・水野右京進・五世孫永重建立碑は長命寺境内(享保五)

▲26志段味城(しだみ、志談城)・名古屋市守山区志段味大字野添通称しろあと・水野右衛門作・東春日井郡誌、尾陽雑記(二の曲輪の構え、堀の廻れる跡残れり)・地名:城跡

▲27大森城(米田城)・名古屋市守山区大森・東春日井郡誌(川南字番城、川北字田中城)、守山市史(矢田川南二丁、やなだが城)・明治維新まで堀の跡、堀趾

写真番号(21)  
28新居城・東春日井郡旭町新居字郷、城山・水野良春四世孫雅楽助宗国、宗信・東春日井郡誌(大森城主尾閥と合戦、字尾瀬ノ木、良春墓碑位牌は新居退養寺)

写真番号(22)  
29今村城(松原広長城)・瀬戸市共栄通5-39前・松原広長・石碑(昭和十年御典医矢野知久恵末孫矢野京一建之)・東春日井郡誌(広長は寛正より文明の人、東西50間×南北60間)

写真番号(23)  
30田楽城(たらが、田楽砦)・春日井市田楽1790-13長江芳宅一帯・東春日井郡誌(天正役)

写真番号(24)  
31上条城(かみじょう)・春日井市上条町2-48林重準氏宅内)・小坂雄吉・石碑あり(建立経緯メモを欠く)・東春日井郡誌

写真番号(25)  
32大留城A(上大留城)・村瀬作右衛門・春日井市大留町字東島918神明社一帯・張州府志、高蔵寺町誌(作右衛門、長久手合戦に池田勝入とともに討死)、東春日井郡誌(作右衛

門碑は大日堂墓地)

▲33大留城B(下大留城)・春日井市大留字中之庄・高蔵寺町誌(谷口友之進、日比野六大夫ともに郷土住宅、濠、塁の一部を存す)

▲34白山城・春日井市白山字中島1336-1・松本伊策・高蔵寺町誌(堤10間・7間)

写真番号(26)  
35水野城・水野村大字上水野城ヶ嶺(城が根)・磯村左近・東春日井郡誌・地名:城が根

▲36入尾城・水野村大字下水野・水野備中守致高・張州府志、東春日井郡誌(水野致高位牌は上水野感應寺にあり)

番号(27)見取り図のみ  
37森下城(上末城)・小牧市上末・落合将監勝正、子安親・張州府志、東春日井郡誌、篠岡村誌(安親位牌陶昌院)

写真番号(28)  
38城山城(大草城)・小牧市大草字大洞4738西尾宅裏山一帯・西尾式部道永・東春日井郡誌、篠岡村誌(道永、居城に西に禅刹福厳寺を構える。墓碑永正十一年、東西120間×南北75間)

写真番号(29)  
39品野城A(科野城、秋葉城)・松平内膳正清定、子忠次・東春日井郡品野町上品野491をあがった上の山・東春日井郡誌(天守閣、邸趾、石垣残存、山頂東西20間×南北11間)・地名:城前

写真番号(30)  
40品野城B(桑下城)・東春日井郡品野町上品野・永井民部(松平内膳正家臣)・東春日井郡誌、尾張古城志(東西30間×南北42間一重堀)

▲41北外山城(北外山砦)・小牧市北外山字城、城屋敷、市場屋敷・織田与四郎、小牧役に家康番城・張州府志・東春日井郡誌(東西27間×南北20間)・地名:城、城屋敷、市場屋敷

写真番号(31)  
42南外山城・小牧市南外山字東浦447、北浦441南外山八幡神社境内・堀尾孫助・石碑(建立経緯メモを欠く)・張州府志、尾張志、東春日井郡誌(濠の跡および規模の幾分残存)

▲43宇田津砦・小牧市北外山・小牧役徳川番城・東春日井郡誌（東西134間×南北38間）

志

▲44岩崎砦・小牧市味岡大字字岩崎山・小牧役徳川番城・東春日井郡誌

▲56米野城・名古屋市中村区米野字後旧字城屋敷・中川弥兵衛門（林佐渡守与力）・張州府志、愛知郡誌、中村区史（筈瀬川西、宅地陸田、東西48間×南北58間）・地名：城屋敷

写真番号（32）

45二重堀砦・小牧市味岡大字二重堀545水野氏宅地一帯・小牧役豊臣番城、日根野弘就弟弥次衛門ら守備・石碑「日根野守備中守弘就砦趾」（建立経緯メモを欠く）・東春日井郡誌（東西55間×南北40間）

番号（35）見取り図のみ

▲46田中砦・小牧市味岡大字田中・小牧役豊臣番城・東春日井郡誌（東西16間×南北38間土塁、濠、いまは不明）

57烏森城・名古屋市中村区烏森字村内城屋敷・杉原長房、副田隱斎・張州府志、愛知郡誌（東西36間×南北31間、宅地）、中村区史（6戸、一見面影あり）、実際は現地には見るべきものはあまりなかった・地名：城屋敷

▲47蟹清水砦・小牧市小牧町・小牧役徳川番城・東春日井郡誌（電車停留所・砦跡、古書に東西46間×南北61間）

写真番号（36）

▲48小松寺山砦・小牧市味岡大字小松寺・小牧役豊臣番城（三好秀次）・東春日井郡誌（東砦は方10間、西砦は東西8間×南北10間）

写真番号（37）

▲49外久保砦・小牧市味岡大字久保一色字太閤山・小牧役豊臣番城（丹羽長秀）・東春日井郡誌（東西8間×南北10間）・地名：太閤山

59岩塚城・名古屋市中村区岩塚字郷中62遍慶寺一帯・吉田治郎左衛門重氏、元氏（信長に仕え、永禄十一伊勢にて、戦死）、九郎左衛門信雄に仕える・石碑（大正十一・名古屋市）、説明板（名古屋市・昭和十五年）・愛知郡誌

写真番号（33）

▲50小牧山城・小牧市小牧・織田信長、徳川家康

写真番号（38）

▲51赤津城・瀬戸市赤津城前・熊野伝三郎・瀬戸ところどころ今昔物語

60荒子城・名古屋市中川区荒子町大和が池旧字古城・前田又左衛門・石碑（前田利家誕生地、昭和4、保存会）・張州府志、愛知郡誌（前田利昌、利久、弟利家、子利長、宅地陸田）・地名：城壕、古城橋（愛知郡誌）

## ○愛知郡

▲52押切城・名古屋市西区馬喰町・大屋佐渡守・張州府志、金鱗九十九之塵

▲61東起城・名古屋市中川区東起字城屋敷・前田三郎四郎・張州府志、愛知郡誌（東西64間×南北72間宅地陸田）・地名：城屋敷

写真番号（34）

53日比津北城（乾屋敷城）・名古屋市中村区日比津町字三ノ郷旧字城屋敷・大円寺石碑（日比津城主碑誌・昭和3年）、説明板（名古屋市・昭和32年）・野尻掃部・張州府志（開墾田）、愛知郡誌（東西32間×南北30間）

▲62下一色城・名古屋市中川区下一色・前田与十郎・張州府志、愛知郡誌（今民家）

▲54日比津南城（栗山城）・名古屋市中村区日比津町字三ノ郷・野尻藤松（掃部家老）張州府志、中村区史

▲63前田城・名古屋市中川区富田町大字前田字寺西56速念寺一帯・欠

▲55日置城・名古屋市中村区日置・織田掃部忠寛・張州府

写真番号（39）

64那古野城・名古屋市中区南外堀町・今川氏豊、織田信秀、織田信光、名古屋高信・名古屋城史（西の丸に今川蔵、柳蔵とも）・地名：今市場、中市場、下市場

写真番号（40）

65末森（末盛）城・名古屋市千種区田代町城山・織田信秀、  
信行・石碑（昭和二年）、説明板（名古屋市教育会・昭和九、  
名古屋市・昭和三十八）・張州府志・地名：城山

写真番号（41）

66小林城（前津小林城）・名古屋市中区大津通4-21清淨寺境  
内・牧長義（妻は信長妹小林殿）・名古屋の名所旧蹟によれ  
ば石碑があった。説明板（名古屋市・昭和三十八）・張州府  
志、尾張徇行記

写真番号（42）

67古渡城・名古屋市中区下茶屋町東別院・織田信秀・石碑  
(大正七・名古屋市)、説明板（名古屋市・昭和二十九）・  
張州府志・東西78間×南北56間陸田

▲68城畠（熱田村城）・東熱田村字沢上俗称城畠・新宮行家、  
岡部又右衛門・愛知郡誌・1反1畝14歩

写真番号（43）

69御器所西城（御器所城、五器所城、御器曾城）・名古屋市  
昭和区御器所町1-2旧字北市場、尾陽神社一帯）・佐久間家  
勝・石碑（昭和三年）・尾張志、愛知郡誌、御器所史話、張  
州府志（吉野右馬允、佐久間美作、服部將監、三ヶ所あ  
ったものか、1丁四辻）

▲70御器所東城・名古屋市昭和区御器所町東脇・服部將監・  
張州府志、尾張志、愛知郡誌（空壕）

▲71川名城（伊勝城）・名古屋市昭和区伊勝町・佐久間彦五  
郎、佐久間半左衛門・張州府志、愛知郡誌（1.字南分旧  
字城屋敷、2.字大藪旧字城屋敷）、川名のあゆみ（区画整  
理までは歴然、いまは説明者がなければわからない、東西  
31間×南北32間）・地名：城屋敷（2）

写真番号（44）

72中根南城（菱池城）・名古屋市瑞穂区弥富町菱池41旧字西  
市場または丸根町2-54観音寺境内・織田越中、村上弥右衛  
門、村上承善・張州府志（織田越中は魯鈍の人）、愛知郡誌  
(空壕)、中根の砦と棒の手（東西28間×南北27間）・地名：  
西市場

▲73中根中城（中根丸根城）・名古屋市瑞穂区弥富町丸根1  
丁目行信寺西・村上弥右衛門・張州府志、愛知郡誌（東西  
26間×南北30間）

写真番号（45）

74中根北城・名古屋市瑞穂区日向町3丁目（旧牛山字中根  
山）・村上小膳

写真番号（46）

75山崎城・名古屋市南区山崎水車町2-7安養寺一帯・歳人淨  
盤、佐久間右衛門尉信盛・・張州府志（東西38間×南北28  
間）、尾陽雜記（東西20間×南北48間、二重堀）

写真番号（47）

76山崎砦・名古屋市南区岩戸町1丁目白毫寺（山崎村字浅  
間山）・佐久間信盛・愛知郡誌、尾陽雜記

写真番号（48）

77桜村城A（桜大寺掛城、ガウメの城）・名古屋市南区桜本  
町（旧桜村東郷梅）・中村氏、山口左馬助・張州府志、愛知  
郡誌（東西33間×南北35間、空濠）

▲78桜村城B（桜中村城）・名古屋市南区桜本町（旧桜村字  
中村）・山口教房一子教継一子教吉（※織田信長に叛し今川  
に付き、殺される）・愛知郡誌（東西37間×南北36間、四方  
濠跡）

▲79桜村城C（桜丸根城）・名古屋市南区桜本町（旧桜村字  
北尾）・城主未詳・愛知郡誌（東西40間×南北32間、東西北  
に濠跡）

▲80笠寺寺部城・名古屋市南区笠寺町（旧笠寺村寺部、別  
称市場、郡誌では前浜村字天満旧字寺部）・山口盛重一重俊  
(内蔵松本城砦に戦死)・重勝（海老丞、祥雲、のち星崎  
城）・張州府志、愛知郡誌

▲81笠寺市場城・名古屋市南区笠寺町（前浜村字市場）・山  
口安盛一子宗可一子盛隆（海老丞、美濃堂洞城にて戦死）・  
愛知郡誌（大概宅地）

写真番号（49）

82戸部城A（笠寺出城・松本城）・碑の位置は名古屋市南区  
戸部町3-24および4丁目の境、旧表記大字千竈字城、上は  
碑がある場所で実際の跡は坂下、城下町方向、永田勝三氏  
談・山口愛智（愛智助右衛門）・石碑4（1は当古城主戸部  
新左衛門政直墓地移転記念碑、昭和4；2は戸部新左衛門  
政直靈碑、明治7後胤戸部新吾建之；3は句碑、昭和33；  
4戸部城址碑・張州府志（今陸田水田）、愛知郡誌（東西15  
間×南北99間耕地、西と南に懸崖、東の新池は濠址・※戸  
部新左衛門について墓碑があるのみで、本来の地誌類に  
は記述がないもよう。注意が必要、ただし『よびつぎ』に

富部神社近く長楽寺に位牌があるとされる。・地名：城

村字中根通下・城山)・地名：城山

▲83戸部城B (戸部一色城)・名古屋市南区戸部町か・一色彦右衛門、愛智吉清、水野大和守・張州府志 (古墳別にあり、東西20間×南北60間)、愛知郡誌 (南北西、濠形存す、愛智塚ハ城址南ニ近接ス)

写真番号 (50)

84新屋敷西城・名古屋市南区鳥栖町2丁目医王寺周辺、井戸は2-10近藤氏宅、(旧千竈村新屋敷字北屋敷)・山口新太郎・張州府志、愛知郡誌東西96間×南北85間耕地宅地医王寺境内、三方空濠土塁

写真番号 (51)

85新屋敷鳥栖城 (東城)・名古屋市南区鳥栖町旧千竈村新屋敷東切字中屋敷旧字鳥栖・成田久左衛門・張州府志、愛知郡誌 (東西90間×南北69間、東北西三方空濠土居、みな竹林)

写真番号 (52)

86星崎城・名古屋市南区星崎本地町1笠寺小学校一帯・岡田直教 (織田信雄に長島で誅殺される一子直孝、善周・山口重勝、重政)・石碑 (愛知県)、秋葉神社にも石碑があるが、調査当時は気づかず・張州府志 (陸田)

写真番号 (53)

87鳴海城 (根古屋城)・名古屋市緑区鳴海町字城・安原備中、佐久間右衛門・石碑 1 昭和18年・子孫岡部長景撰并書、裏面に寄付者 石碑 2 (昭和20年3月 愛知県)・張州府志 (東西2郭)・地名：城、根古屋

▲88鳴海城丹下砦 (丹家城)・名古屋市緑区鳴海町大字丹下字清水寺および字九ノ木、光明寺北側丘山・水野帶刀、山口海老丞、柘植玄蕃・張州府志 (今為駅舎及田)、尾參戦跡史、愛知郡誌 (ともに東西46間×南北43間耕地)

▲89鳴海城中島砦・名古屋市緑区鳴海町字下中旧字中島・梶川平左衛門・張州府志

▲90善照寺砦・名古屋市緑区鳴海町字砦37、瑞泉寺北丘山公園・佐久間左京助・愛知郡誌 (東西24間×南北16間耕地)

写真番号 (54)

91一色城・名古屋市千種区猪高町一社旧字一色中島、俗称城山・柴田源六・張州府志、尾張志 (一色村中島、陸田にて四面隣跡)、猪高村誌 (土中より銃丸)、愛知郡誌 (一社

▲92上社城・名古屋市千種区猪高町上社字洞 (旧字前山)・加藤勘四郎 (加藤勘三郎のち高針城へ)・張州府志、愛知郡誌 (高さ20間許)

写真番号 (55)

93下社城・名古屋市千種区猪高町一社、旧字下社明徳寺 (みょうとくじ)・柴田源六・張州府志 (柴田源六は柴田権六かとする)

写真番号 (56)

94高針城・名古屋市千種区猪高町高針字古谷 (前) 俗称城の藪・加藤勘三郎 (加藤右衛門大夫藤原信祥)・張州府志、愛知郡誌 (東西40間×南北35間)、猪高村誌・地名：城の藪

▲95岩作東城・長久手村岩作字城ノ内・今井五郎大夫・張州府志、愛知郡誌 (東西44間×南北32間、西側溜池が外濠)・地名：城ノ内

▲96岩作西城・長久手村岩作字藪田旧字城屋敷・愛知郡誌、尾張志 (東西30間×南北10間)、地方覚書、那が久手・地名：城屋敷

写真番号 (57)

97長湫城・長久手村大字長湫字城屋敷・加藤太郎右衛門・石碑 (文化6年)・張州府志 (今民家)、那が久手・地名：城屋敷

写真番号 (58)

98大草城・長久手村大草字城下・福岡新助・愛知郡誌 (熊張村字溝ノ杅、旧大草村に城山城下地名あり、東西20間×南北25間)、那が久手・地名：城下

▲99山口城・幡山村 (瀬戸市、旧上菱野村) 大字山口本泉寺境内・武田信玄斥候・張州府志 (山口海上洞物見ヶ嶺)、愛知郡誌、瀬戸ところどころ今昔物語 (山田泰親)・地名：物見ヶ嶺

写真番号 (59)

100本地城 (植田城)・瀬戸市本地南浦31 (植田島) 柴田義伴氏宅一帯・松平平内 (松原平内)・愛知郡誌 (東西33間×南北39間、内外濠跡細長ノ溜池)、瀬戸ところどころ今昔物語

写真番号 (60)

101菱野城・瀬戸市大字菱野760旧字羽根島、大沢重行氏宅  
一帯・林次郎左衛門・愛知郡誌、瀬戸ところどころ今昔物語  
(羽根島、羽根屋敷、高土居、東西30間×南北37間)

番号 (61) 見取り図のみ

102植田城・名古屋市昭和区天白町大字植田字前田66室賀  
氏横地氏宅周辺・横地秀綱、十世孫秀重、秀房、秀種、秀  
行・張州府志、愛知郡誌 (東西62間×南北37間)、天白村誌

写真番号 (62)

103島田 (嶋田) 城・名古屋市昭和区天白町大字島田字西上  
郷・牧虎蔵、牧右近大夫・張州府志、愛知郡誌 (東西43間×  
南北100間、土塁、空濠僅かに存す、地蔵寺縁起に天文11年  
牧義次本寺修造)

▲104平針城A・名古屋市昭和区天白町大字平針、元郷字城  
跡・小野田勘六・張州府志、愛知郡誌 (東西25間×南北30  
間、土塁猶存、墨内水田)、天白村誌・地名:城跡

▲105平針城B (平針第2古城)・名古屋市昭和区天白町大  
字平針城下、元屋敷・天白村誌・地名:城下元屋敷

▲106赤池城・日進町赤池大應寺・丹羽七右衛門・張州府志  
(元郷)、愛知郡誌 (旧字城ノ内、東西26間×南北46間、土  
塁猶存、丹羽秀信本村竜渕寺創建)

▲107梅森城A・日進町梅森西後・松平三蔵高照・張州府志、  
愛知郡誌 (村北方西後、東西9間×南北23間)

▲108梅森城B・日進町梅森西後・松平助右衛門信次、松平  
助左衛門 (三蔵家来)・張州府志、愛知郡誌 (村東方西後)

▲109浅田城・日進町浅田字東前田俗称上郷内城屋敷・丹羽  
伝左衛門・愛知郡誌 (東西30間×南北36間、土塁猶存)・  
地名:城屋敷

写真番号 (63)

110岩崎城・日進町岩崎字市場旧字城山・丹羽勘助、丹羽氏  
清 (本郷城より移す)、氏識、氏勝、氏次・張州府志、愛知  
郡誌 (東西85間×南北100間、空濠猶存深2間乃至3間、幅  
2間乃至4間)・地名:市場、城山

▲111本郷城・日進町本郷字鴻土旧字元屋敷・丹羽勘六、勘  
助氏員 (折戸城より移す)、氏興、氏清 (天文7、岩崎城に  
移す)・張州府志、愛知郡誌 (東西21間×南北11間4尺、四  
周土塁猶存)

▲112折戸城・東郷町折戸中屋敷旧字城根、八幡社西・丹羽  
氏從一子氏員 (文亀3年本郷に移る)・張州府志、愛知郡誌  
(東西25間×南北18間空濠址僅存)

▲113藤枝城・日進町藤枝字小六田・丹羽常隠・張州府志、  
愛知郡誌 (東西30間×南北40間許、東西北土塁猶存)

▲114傍爾元 (傍示元) 城・東郷町春木 (はるこ) 市場屋敷・  
丹羽氏勝・張州府志、尾張志 (東西31間×南北34間、南西  
北三方に濠あり)、東郷村誌

番号 (64) 見取り図のみ

115諸和 (諸輪) 城・東郷町諸和字上市、旧は上屋敷・丹羽  
同休・尾張志 (東南二方土居、西北二方堀、東西28間×南  
北40間、土塁堀幅を除く)、地方観書

116諸和 (諸輪) 中ノ城・東郷町諸和字中市、旧下屋敷・永  
祿七年丹羽氏識・尾張志 (南北西隣形残、東西20間×南北38  
間)、東郷村誌

117諸和 (諸輪) 南ノ城・東郷町諸和・柘植重次、寛文10・  
東郷村誌

写真番号 (65)

118沓掛城・豊明町大字沓掛字東本郷・築田出羽守、織田越  
中守、川口久助・石碑、昭和31年5月豊明村、村制50周年  
記念・張州府志

## A-2 上記以外尾張部(中島郡・海部郡・葉栗郡・ 知多郡分)

### ○中島郡

写真番号 (66)

刈安賀 (苅安賀) 城・一宮市苅安賀・石碑 (愛知県、年月  
日記録せず)

写真番号 (67)

浅野城 (浅野長政宅)・一宮市浅野・石碑1 (愛知県、年月  
日記録せず) 石碑2 (大正五年四月)

参考写真番号 (68)

下津城 (稻沢市下津)・この図は1986年ころで他とは時期が  
異なる。

番号 (69)

溝口城・稻沢市溝口町西溝口北郷

○中島郡・海部郡

写真番号 (70)

勝幡城・中島郡平和町字六輪、海部郡佐織町勝幡・織田信定一子信秀・石碑（愛知県、大正4年11月「当御大典」、寄付者竹田千代足、村長竹田寿三郎ほか6名・\*現況は日光側河川改修により、写真の場所は消滅し、碑も移動している模様

写真番号 (80)

黒田城・木曽川町黒田

○海部郡

写真番号 (71)

蟹江城・蟹江町蟹江本町字城、石碑地は字城之前21字佐見鉱泉所前、本丸井戸は字城ノ割8字佐見時四郎氏宅前・石碑（大正4年11月）

写真番号 (82)

丸根砦・名古屋市緑区大高町・石碑・『愛知県史蹟名勝天然紀念物』

写真番号 (72)

蜂須賀城・美江町蜂須賀蓮華寺・石碑（愛知県）

写真番号 (83)

宮山城（大野城）・常滑市金山桜谷・佐治一成像、石碑

○丹羽郡

写真番号 (73)

岩倉城（岩倉町下市場）・石碑・山内一豊誕生地が近くにある。

写真番号 (84)

大草城・知多市大草

写真番号 (74)

木ノ下城・犬山市犬山字愛宕・石碑

写真番号 (85)

富貴城・武豊町大字富貴字郷北

写真番号 (75)

小口城・大口町大字小口城屋敷大口第二小学校・石碑・現在復原模擬城がある模様

写真番号 (86)

布土（フット）城・美浜町大字布土

写真番号 (76)

羽黒城・犬山市大字羽黒城屋敷、摺墨塚は字摺墨37石田饒夫氏宅地内・石碑（大正6年愛知県、1金50円建設総工費1金10円愛知県補助金、建設及び土地提供石田市五郎）

写真番号 (87)

河和城・美浜町大字河和字西谷

写真番号 (77)

楽田城・犬山市楽田字城山97楽田小学校・石碑（大正5年、愛知県）

B 岐阜県（美濃部）

写真番号 (88)

鷺山城・岐阜市鷺山

写真番号 (78)

青塚砦・犬山市楽田青塚（\*青塚古墳）

写真番号 (89)

川手城・岐阜市下川手

写真番号 (90)

加納城・岐阜市西加納町

写真番号 (91)

明知城・恵那郡明智町字城山

写真番号 (79)

三ツ井城（重吉城）・丹陽村大字重吉・尾藤重吉・石碑（年月日メモに欠く）

写真番号 (92)

岩村城・恵那郡岩村町字城山

○葉栗郡

写真番号 (93)

猿啄城・加茂郡坂祝町勝山

- 写真番号 (94) 大給城跡・大内町・石碑  
小里城・瑞浪市稻津町小里字城山
- 写真番号 (95) 写真番号 (109)  
金山城・可児郡兼山町 松平氏館・松平村
- 写真番号 (96) 写真番号 (110)  
堂洞城・美濃加茂市蜂屋町下蜂屋、加茂郡富加村・石碑 (南  
無阿弥陀仏) 足助城 (飯盛城)・足助町・石碑
- 写真番号 (97) 写真番号 (111)  
鵜沼城・各務原市鵜沼南町 真弓山城・足助町・石碑
- 写真番号 (98) 写真番号 (112)  
八神城・羽島市桑原町八神 佐生城・足助町
- 写真番号 (99) 写真番号 (113)  
竹ヶ鼻城・羽島市竹ヶ鼻・石碑 (現在は隣接地に移設) 大観音寺城・足助町
- 写真番号 (100) 写真番号 (114)  
墨俣城 (州股城・一夜城)・安八郡墨俣町 藤井城・安城市藤井・石碑 (愛知県)
- C 愛知県 (三河部)**
- 写真番号 (101) 写真番号 (115)  
伊保城・豊田市貝津町・石碑 桜井城・安城市桜井城阿原・石碑 (大正5年12月愛知県)
- 写真番号 (102) 写真番号 (116)  
童子山城 (挙母七州城)・豊田市小坂本町・石碑 安祥城・安城市・石碑 (愛知県)
- 写真番号 (103) 写真番号 (117)  
挙母城 (佐久良城)・豊田市元城町 八橋葦香城・知立市・石碑 (昭和28年9月)
- 写真番号 (104) 写真番号 (118)  
広瀬城 (広瀬東城)・豊田市広瀬町・石碑 本證寺伽藍・安城市野寺
- 写真番号 (105) 写真番号 (119)  
広瀬城 (広瀬西城)・豊田市広瀬町 刈谷城・刈谷市・石碑 (愛知県)
- 写真番号 (106) 写真番号 (120)  
寺部城 (広瀬東城)・豊田市寺部町・石碑 西尾城・西尾市・石碑 (愛知県)
- 写真番号 (107) 写真番号 (108)  
小原市場城・西加茂郡小原村・石碑

## Medieval Castle Ruins in and around Noubi Plain A collection of old photographs taken in 1960s.

Hideo HATTORI

A lot of medieval castle ruins were seen in and around Noubi Plain (south of Gifu Prefecture and west of Aichi Prefecture) and Mikawa, in 1960s. In the 16<sup>th</sup> century, the warlords who lived in these castles became vassals of Oda Nobunaga and Toyotomi Hideyoshi. Forty years have elapsed since then. The land was developed and most of the castle ruins disappeared.

I photographed these remains in my boyhood. The remains do not exist now, but I have many photographs and see them even now.

First, I would like to introduce those pictures of castle remains, and aerial photos next.

I also introduce cadastral maps, drawing map made in Edo period, and the books on cultural assets. I want to imagine the old state of those castles with those pictures and books and my heart goes out to the history, preservation and destruction of the ruins.